

粉なみぢんになつて遂に鴉の食物となつたといふ話がある。

何でもこの様に知識といふものが必要である。知識さへあれば、今まで害になつたものでも却つて有益になすことができる。

貝を食べやうと思つて、中の肉を引き出さうと思ふと、貝は縮上んで中々出てこない。けれども一寸考を廻らして鍋にかけて煮ると、苦もなくポロ／＼離れてくる。

(未完)

川音につれて啼き出す河鹿かな

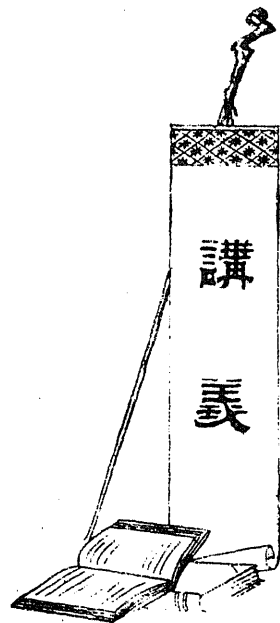


兒童研究法

文學士 松本孝次郎講演

視覺の研究上注意すべきこと

之はグライエル氏の觀察の順序に由て申しませう
イ光を感ずること暗き室内に睡れる小兒は若し燭
光が其顔面に近づく時は醒むるか或は醒むること
なくして眼瞼を固く閉づるか。幼兒の瞳孔は眼を
被ふて光線を遮るものある時は擴大となるか、室
内を忽然暗黒にする時は不快の狀を呈するか。或



はかゝる不快の狀は適當なる光線を遮ぎりし時に顯はるゝか。若し一眼を手にて覆へば他眼の瞳孔は自ら擴大となるか。光を不意に薄暗き室に持ち來る時は小兒は頭を他方に轉ずるか、かゝる状態にありては小兒は泣くや否や。

如何なる距離にある燭光は快感の狀を呈せしむるか、如何なる距離にある輝きたる物體は快感の狀を顯はさしむるか。

最初眼は開かるゝよりもむしろ閉づるものなるか

何日頃より開くに至るか。眼は弱き光に於ては多く開かるゝか。屢々一眼は閉ぢ他の一眼は半或は全く閉ぢたることあれど何日頃よりして兩眼を同時に開閉するに至るか。光線明なる處に於て新生兒の眼前に青、黄、綠、赤、黒等の玻璃板を保持する時は顔面の表出に如何なる變化あるか。

(ロ)色の識別 小兒は何日頃よりして色を識別し得るの形跡ありや。又如何なる色を好むが如く見ゆるか。

小兒若し自ら手を延して物を握り得る頃に至りて種々の色を其前に置けば如何なる色を取らんとするか。なほ此際左右いづれの手を用ゐるかを注意すると左きゝ右きゝの參考になります。

若し小兒が稍言語を解し得るか、又は知覺が明瞭になるに至らば種々のおもなる色を二様づゝとりそろへおき、或一色を示して之と同色の物を選び出さしめ其答の正しき場合と然らざる場合とを分るがよろしい。又稍成長したる後には色に關する語は如何に多くを知れるかを檢するがよろしい。

(ハ)方向に就きて 何日頃より燭光の方を見つゐるか。何日頃より上下及左右に運動する燭光を追視

するか（この實驗は出生後第二日よりはじめて二三日毎にするがよろし、通常は第二十以後に於てかやうの作用はじまるとフライエル氏は言はれました）眼の運動と共に頭を運動するに至るは何日頃よりはじまるか。

始に物體を凝視する時に兩眼は共に動くか。將た然らざるか。眼は永く動くことなくして物體を凝視するか。

(二)遠近の物體を見るにつきて、輝きたる小なる物體を眼に近く保つときに瞳孔の收縮するを見るを得たならば、それは小兒が近き物體を凝視するものであることを知るに足る。即ちこゝに近き物體に對して兩眼の協同作用あることを證する。通常小兒は最初母の顔を凝視するものであるがかゝる作用は何時頃よりはじまるか。遠き物體を

凝視するは何時頃よりはじまるか、又如何なる距離の物を凝視するか。

初小兒は手を突然彼の顔の方に出すも瞬きすることなし。而して其瞬するは何時頃よりはじまるか。又突然手を小兒の顔の方に出す時に於て瞬するは何時頃よりはじまるか。

以上は家庭日誌をつけるに付て注意すべきことでありますが幼稚園や小學校で注意すべきことを之から申しませう。

(イ)眼瞼殊に下眼瞼を動かすことを司る筋肉即ち眼輪匠筋のはたらき方を注意することが必要であります。之は笑ふ時に下眼瞼の處に皺のよる筋であります。が幼稚園や小學校の兒童の中には此筋の作用が弱くなり張力なくゆるみて下眼瞼の處がふくれて袋の様になつて居る者があります。膨脹は

腦の作用の弱さを示し又一時かゝる状態ならば其
 兒は非常に衰弱して居るか疲労して居るかを示し
 ます。そうしてかやうな兒は屢々頭痛を訴へるも
 のであります。注意しなければなりません。

(ロ)又兒童の二歩ばかり前で鉛筆の様なものを動か
 して見せる時に眼を動かさないで頭全體を動かして
 見る兒があります。之は喜ぶべき現象ではあり
 ません。此事は精神が虚弱であるか。衰弱して居
 るか疲労して居るかを現はすのであります。

(ハ)又眼の運動の非常にはげしい兒童があります。
 之は丁度身體がふるへるやうに目がふるへながら
 運動するのであります。指頭に起る自發的運動と
 よく似て居ります。神経質の兒の手が震ふるへる
 やうに神経質の兒の眼は運動のはげしいものであ
 ります。

矢傳



野村望東尼 (つづき)

下村三四吉

これよりさき、長藩が幕府の征討軍に對し、罪
 を謝して恭順の意を表せんとするや。同藩士高
 杉晋作等の壯士は、これに反對して、宜しく幕軍
 と抗戦すべしと唱へき。然るに。恭順黨の論は
 遂に勝を制し、蛤門の變に與かりし三家老を死
 刑に處して、伏罪の實を表せしため、交戦を見る
 に及ばずして事止みけること、前に略述せるが
 如し。晋作、憤慨に堪へずといへども、頽勢支ふ
 るに由なく、しばらく機を待たんために、望東尼